
魔法（ゆめ）香る街角の詩（うた）

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法香る街角の詩

【Zコード】

Z9397Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

隣の家に引っ越してきたのは、魔法使いの女の子だった。

1話分が短い、変な話の魔法もの（？）です。

第1話 隣人は魔法使い

「あつ、お隣、誰か引っ越してくるんだね」

幼馴染みの遥架はるかが言った。

この名前だと、どっちか判別できないかもしないから言及して
おくと、遥架は男の子だ。

私、美羽みはとは昔から大の仲よし。
家が隣同士の幼馴染みだから、当然といえば当然なのかも知れないけど。

今ではさりに、同じ高校に通う同級生もある。

そんな私の家の隣、遥架の家とは反対側の隣の家に、なにやら
トラックが停まって、次々と荷物が運び込まれているのが見て取れ
た。

この家は、随分と長いこと、空き家になっていたのだけど。よう
やく住む人も決まったということか。

「そうだね~。どんな人が住むのかなあ」

私が期待と不安が入り混じった声をこぼすと、すかさず遥架が言
葉を重ねてくる。

「ヤのつく職業の方だつたりして
「ちよつとー、怖い」と言わないでよー。」

まったく、遥架は……。

もつとも、遥架の意地悪発言はいつものことなのだけど。

「あつ、来たみたいだぞ」

遥架の声に従つて視線を向けると、ひとりの女の子が「ちりへと歩いてきていた。

そして隣の家 引越しの荷物が運び込まれている家の前で立ち止まる。

私たちの視線に気づくと、彼女は可憐な花が咲き乱れるかのような笑顔を振りまきながら話しかけてきた。

「こらにちは～、隣の方ですかあ～？ 私、結音ゆいねつていいますう～。よひしきう～」

なんだか、のんびりした感じの子だなあ。
それが私の第一印象だった。

「ヤクザじゃなくて、よかつたな」

遥架が耳打ちしてくる。
ま、でも、それは確かによかつた。

「だけど、親がヤクザとかって可能性も、ありえるかもしれないけどな……」

遥架はさらに耳打ちを追加してくる。
まつたぐ、こいつは……。

それはともかく。

私は田の前の女の子をじつくりと観察してみた。

ぱつと見は幼いイメージだけど、おやしく私たちよりこへつか下
中学生になるがどうかといったところだらうか。
ポニーテールにまとめた髪がたぐいせうと揺れているのが、ひとつ
も可愛らしさを助長している。

しかも、ここにこと温かい笑顔を向けてくる様子を見ること、地上
に舞い降りた天使かとも思えるほど。

……ところは、さすがに言こすがだらうなさ。

た少し気になるのは、この家族の姿が見当たらぬこと。
先にこの結音ちゃんって子だけ来て、他の人はあとから来るので
うづか?

私が質問してみると、思いがけない言葉が返ってきた。

「あたし、ここにどうでも住むの~!」

結音ちゃんはあくまでここやかし、わらつと答えてくれた。
まだ中学に入るか入らないかくらいこの歳みたいなのに、ひとり暮
らしだなんて。

「大変ねえ……」

私は思わずつぶやいていた。

「うふ~。頑張って魔法を使わなことお~
『えつー~』

私と遙架の声が重なる。

今……なんとおつしゃいましたか?

「あ……秘密だつたんだ~、言つたやつたあ、てへ あたし、魔

法使いなの～。でもこれって、秘密だからあ～、誰にも言わないでね～！ 約束よお～ー！」（にこお）

結音ちひさんは、やつぱり花のような笑顔を振りまきながら、そんなことをのたまつた。

私と遙架は、黙つて頷くことしかできなかつた。

……隣人は、もしかしたらヤクザよりも厄介な人なのかも……。

とはいえ、楽しくはなりそうだ。

ちょっと現実逃避気味にではあつたけど、私は前向きに考えることに決めた。

「やー、やー。

騒がしい鳴き声で田が覚めた。

学校へ行く準備をして外に出でみると、なぜか猫の大群がびっしりと結音ちゃん家の前の道路を覆い尽くしていた。
な……なんだこれ……？

「あー、おはよー」

そんな猫たちに囲まれていたのは、もちろん結音ちゃんだった。
まあ、他にありえないとは思つたけど。

それにしてこの子、またたびの匂いでもふり撒いてるの？

……って、やばい！ 遅刻する！

猫で覆い尽くされている現状つてのも気になつたけど……。
結音ちゃんは魔法使いらしいから、魔法でどうにかするでしょう。

「おはよう、結音ちゃん！ でも私、急ぐから… またね！」

軽く挨拶を残して、私は遙架の家のチャイムを押す。
私が迎えに行かないと出てこないのだ、遙架は。

それで遅刻したことが何度あつたことか……。

「おはよう、美羽。……あれ？ 結音ちゃん家の前、猫が

「今はそれどころじゃないわ！ 学校まで走るわよー」

「あ……ひむ……」

慌ただしく走って登校するのも、「」へあつられた光景だ。

そして放課後。

いつもより、私は遙架と一緒に下校してきた。

「やついえば、今朝のつて……」

「猫だつたわよね。何十匹もいたよつな氣がすむ……」

「やあ。

家の前まで着くと、やつぱり猫はいた。でも、朝とは違つて1匹だけだつた。

「黒猫だね」

「そうね」

しかもその猫は、結音ちやんの足にべつたりとすつ寄つてゐる。

「あつ、おかえりいー」

猫にすつすつされたまま、結音ちやんが満面の笑みで私たちを出迎えてくれた。

「なつかれてるわね

「うそ。じつよー、困つたなー

全然困つてこないよつて思えなー口調だつたナビ。

「まあそれだけなつかれてたら、飼うしかないだろ。魔法使いといえば、やっぱり使い魔の黒猫つてのが基本だし」

遥架がきつぱつと叫つてゐた。

いや、まあ、やうかもしれないけど……。

「うそ～、そうだね～」

「うやら結音ちゃんも納得したよつだ。つて、あつさり納得しちゃうんだ……。

わざやあ、なつてこる猫を放り出すつてこいつのも可哀相だし、飼つことに賛成だけど。

「結音ちゃん、ひとり暮らしなのに、大丈夫なのかな……。私が餌代とか世話とかに關して心配しているというのに、結音ちゃんと遥架はまったく気にする様子もなく、使い魔として飼つ方向で話は進んでいるようだつた。

「それじゃあ、名前をつけてあげないとな

「名前……うん、決めた！」『ね』』

「そのままじやん！」

さすがにこれは、あまつにもひどい……。

「もうちょっとちゃんと考えよつねー。」

「じゃあ～、く

「黒いからクロなんでのも却下ね」

「う……」

図星だつたらしく。
考え込む結音ちゃん。

「決めた！ Kで！」「

「アルファベット…。」

とは思つたものの、まあ、まだマシかな、と結論づける。ところ
わけで、命名『K』と相成りました。

実際のところ、KUROの頭文字でKだったみたいなのだから。

「それじゃあ、行こう、Kちゃん…。」

「あいしゃー！」

結音ちゃんの言葉にまつわつと答え、Kはしつかりと2本足で立
ち上がつたK……。

そのまま結音ちゃんに続いて、家の中に入つていつてしまつた。

呆然と立ち尽くす私。

うん、まあ、見なかつたことによつた……。

隣に立つてゐる遙架も、「今日の晩い飯はなにかなあ～」と、現
実から目をそむけてゐるよつだつた。

第3話 たんぽぽの綿毛

暖かな春の日差しの中、私はいつものように遙架と一緒に歩いていた。

ふと田の前を白い影がよぎる。

「綿毛だ」

学校帰りの野道。

たくさんたんぽぽが綿毛を飛ばす。
もう、そんな季節になっていたんだ。

「綺麗……。」いつやつて、どこまでも遠く飛んでいくのね

「まあ、限界はあるだらうけどな。アメリカにまで飛んでいけたら、
す」」けどなあ

「巨大な綿毛なら行けるかもしねないよ?」

とまあ、いつもの」とく他邊もない話をしつつ歩いていると。

「なんだ、あれ?」

遙架が不意に空を指差す。

そこには見慣れぬ巨大な物体
あれつて、見るからに……。

「巨大綿毛!-?」

やう。

まさにたんぽぽの綿毛、といったよつた見た田の、だけど直径は

優に数十メートルはあらうかという物体が、上空にぶかぶかと浮かんでいたのだ！

なにやら、遙架がじとーっとした視線で私を睨んでくる。

「美羽があんなこと言つから……」

「そ……そんなわけないでしょ……たぶん……」

否定はしたものの、ちょっと自信がなくなつてくる。

結音ちゃんが隣に引っ越してきてから、おかしな出来事は何度か目撃している。

そのせいで、私自身もおかしなことを引き寄せる体质になつてしまつた、というのも、ありえない話ではないのかもしれない。なんて、バカな考えまで浮かんできていたからだ。

周囲には野次馬の数も増えてきた。

じうやら、幻覚とかつてわけでもなさそうだ。

と、そのとき。

聞き慣れた声が響き渡る。

「すみません、通してくださーーー！」

相変わらずのんびり口調の結音ちゃんが、人波をかき分け、巨大綿毛のほうに向かつて駆けていった。

そして。

おもむろに取り出した、先端に星の飾りがついた杖みたいな物を振りかざす。

「えいっ！」

杖の先端からキラキラした光が放たれ、辺り一面に満点の星空の
ように広がっていく。

無数の光に包まれた巨大綿毛は、一瞬にして普通の大きさの無数
の綿毛に分裂し、そのまま空へと舞い上がつていった。

「おお～～～！」

歓声が上がる。

青空に映える、無数の真っ白い綿毛。

それはとても幻想的で、美しい光景だった。

でも。

結音ちゃん、魔法のことって秘密じゃなかつたの……？

家に戻つた結音ちゃんにそう指摘してみたら、案の定、彼女は慌
てふためいた。

第4話 でんでんむし

じとじと雨模様。

今日も今日とて、私は遙架と一緒に歩いていた。

傘を差して寄り添い歩く。

せつかくだから、傘を忘れたとか言ってあいあい傘でもすればよかつたかな。

だけど私が毎日折りたたみの傘をカバンの中に常備しているのを、遙架も知ってる……。

ぽんやり歩いていると、梅雨どきの風物詩が田に飛び込んできた。紫色の花が鞠のよつよつまとまり、しつとり降り続く雨に濡れて、なんとなく寂しさを訴えかけてきてる感じられる。

そんなあじれこの葉っぱの上に、ぺったりと張りつけて丘の虫の姿を見つけた。

「あつ、かたつむりだな

「かたつむりって、どうして、でんでん虫つてこうのかなあ?」

「そりゃあ、電電虫つてこうくらいだし、電気をバチバチ放つからだよ。怒らせると触角から小さな雷みたいに放電し始めるから、注意しろよ」

また遙架が適当なことを言こ出す。

「あのねえ、そんなわけないでしょー。」

「そりですよーー」

不意に新たな声が加わる。

神出鬼没な結音ちゃんが突然現れて、会話に加わってきたのだ。
最近はいつもこんな感じだから、すでに慣れてしまっているのだ
けど。

「まつたく、電気だから電電虫だなんて、遙架はおかしいわよねえ
？」

「ううん、そこは合っているよお。違つてるのは、触覚から電気
を放つってところだよ。実際には触角が避雷針みたいになつて、
雷の電気を吸収しちゃうの～」

そ……そつだつたのか！
かたつむりつて、奥が深い。
ん……？ あれ？ でも……。

「雷のエネルギーってすゞく大きいんだよね。かたつむり、あん
な小さな体だけど、雷なんて吸収しちゃつて大丈夫なの？」
「まあ、吸収できるようになつてるつてだけで、まずありえない
いんだけどね。でももし吸収したらどうなるかといひも～……」

結音ちゃんがそう言つた途端。轟音が響く。
雷が鳴りはじめたのだ。

う、嫌な予感……。

そして当然のじとく、その予感は当たつてしまつ。

ビカツ！ ドオオオオオーン！

凄まじい閃光と爆音が瞬時に襲いかかつてくる。

なんと、目の前のかたつむりに雷が落ちたのだ！

こんな至近距離で私たちにはまつたく被害がなかつたのは、本当
に結音ちゃんが言つたみたいに、かたつむりの触覚が避雷針の役割

を果たしたということなのだろうか。

そして 。

「 ううなるの～ 」

なぜか笑顔の結音ちゃんと、呆然とする私と遙架の目の前で、かたつむりは、見事に巨大化していた。

体長10mくらいの巨大なかたつむりが、町中に現れたという現状。

先日の巨大綿毛のときと同様、またもや野次馬が集まつてくる。

すちやつ！

結音ちゃんがどこからともなく取り出した杖を振りかざす。

「 えい～ ！」

やけにのんびりとした動作と声で杖を振ると、その先端から針金みたいいなものが伸び始めた。

針金の片方の端は、かたつむりにぶすっと刺さる。それでもう片方の端は地面に突き刺さる。

バチバチバチッ！

針金を伝つて、かたつむりから地面へと電気が流れ始めた。

派手な音と光が針金を中心に放たれ、まるで花火のようにも見える。

野次馬たちから大きな歓声が沸き上がる。

やがて、かたつむりはもとの大きさに戻った。

「つまり、針金がアース線の役割を果たしたと
遙架が解説を入れる。
それにしても……。

「魔法、秘密でしょ？」

「あ……そつかあ。また忘れてたあ。てへつ」

結音ちゃんがどうして魔法を秘密にしなければならないのか、詳
しく聞いていないから知らないけど。
はたして、こんな状態でいいのだろうか……。

じめじめじめじめ。

梅酒だから仕方がないけれど、これだけ酒ばかり続くと気が滅入つてくる。

「そこには梅酒つて、梅の酒つて書くのはどうしてなのかなあ？」
「やつや梅の味がするからだよ。美羽、飲んでみな」

と、二つの「」とへ適切な遙架。

「あなたは、また……。そんなわけないでしょ～？」
「やつですよ～」

いつもどおり、結婚したさんがどうからともなく現れ、会話に紛れ込んできた。
結婚したこの神出鬼没ぶりに、もつ完全に慣れてしまった私たち
は、シッコミを入れたりもせず平然と受け入れる。
……諦めてこむ、と表現してもいいかもしない。
……でもここナビ、魔法使つて、ワープとかできるのだから
か。

それはともかく、会話に加わってきた結婚したさんは、さらに驚きの言葉を口にする。

「正解は、梅干しが酒のみつて呑むからよ～」

……いたい、なこを前に出すのや。

「あのねえ、結音ちゃん。そんなの、見たことないよ?」

細音がいやで元も、遙架の遁迹ぶりがついついしねいたのだけれどか。
わつとわ、もとから細音がいやなめちゃつて、とこりかかなつ、といつかれまじく寂なのだから。

8

ପାତା ୧୦

なにやく歴史が變わった

そして視線を向けてみれば、地面は当然で音を立てているのは大粒の雨なんかではなく、赤い塊で……。

ほんとに梅干しが降つてきてるし！

ね
?」

本當だつたでしょー？ とでも言いたげに微笑みを見せる結音ちゃん。

「ちょっとー、この梅干し、魔法で出したんじゃないのー?」

さすがに食つてかかる。

「へんなでも、元詫のため魔を使なんて、と思つたから

だが、細面かやんぱらよとんとした顔を返していく。

「えへ、違うよおへ。あたしは彼女」とを抑えるために派遣されたんだからへ。やつこつ」としたら、怒り切れりやうんだよおへ

……いつたじどりから派遣されたといふのだらうか。……
でもそれが本当なら、別のシッコリも浮かんでくる。

「だったら、」の歎ひじうぶんをへても変なことじよ？　どひじか
してよ！」

「えへ？　これは自然現象だから、無理だよ～」

私の言葉に、結音ちやんは平然と言ひ放つ。

「それじへ、魔法を使つと疲れるじ～」

続けられたぼやき声は、私を脱力させた。

……結音ちやん、単に魔法を使つと疲れるからつて理由で逃れよう
とじてゐるじや……。

とはいへ、私にはそれを確認するすべはない。

隣に並ぶ遙架も、いつものよつに「今日はこじに天氣だな～」なん
て言つて現実逃避してゐるし。

思ひつきり梅干しの雨が降りしきつてゐるところ……。

梅干しの雨は、結局深夜まで降り続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9397y/>

魔法（ゆめ）香る街角の詩（うた）

2011年11月30日20時51分発行